

令和5年度第1回東広島市総合教育会議 議事録

1 日 時 令和5年12月1日(金) 開会9時59分 閉会11時28分

2 会 場 東広島市役所本庁舎本館3階303会議室

3 出席者 (構成員)

東広島市長 高垣 廣徳

東広島市教育委員会

教育長 市場 一也

委 員 渡部 和彦 (教育長職務代理者)

委 員 京極 秀樹

委 員 島本 智子

委 員 西村 恵子

委 員 棚橋 健治

(その他の出席者)

学校教育部長 江口 和浩

生涯学習部長 伊藤 明子

(事務局関係)

総務部次長兼総務課長 大石 美廣

総務課課長補佐兼行政経営係長 早坂 康弘

行政経営係 主査 山本 弦希

4 議 事 東広島市教育大綱の策定について

5 内 容

○開 会

○高垣市長あいさつ

○議 事

東広島市教育大綱の策定について

<高垣市長>

それでは、早速でございますが、議事に入ります。

議題につきまして、事務局から説明をお願いします。

<事務局>

本日は、「東広島市教育大綱の策定について」を議題としております。

先ほど、市長の挨拶にもございましたが、本年度は、平成30年度に総合教育会議において議論いただき、策定いたしました、「東広島市教育大綱」の最終年度となっております。お手元の「東広島市教育大綱について」という1枚ものの資料をご覧ください。

まず、「1 現大綱の策定及び、その後の動きについて」でございます。

平成30年12月に、現大綱を策定いたしました。基本理念を「新しい時代を担う人づくりのまち 東広島」とし、実現するための取組みの方向性を示すものとして、5つの基本方針とその実現のための施策の方向を定めたところでございます。

その下、「(2) 第五次総合計画の策定」でございます。計画で定める5つのまちづくり大綱のうち、「人づくり」の分野の施策の柱は、教育大綱の5つの基本方針に基づき設定し、乳幼児期における教育・保育の充実や、知・徳・体のバランスの取れた「生きる力」を育成する学校教育の充実とともに、学術研究機関の集積等を活かした多様な学びの提供などにより、市民一人ひとりが自らの個性や能力を最大限に発揮し、生涯にわたって充実した人生を送れるまちを目指すこととして掲げました。令和2年3月に策定後、GIGAスクール構想の浸透、学びのキャンパスの推進、Town&Gown構想の推進などに取り組んでいるところでございます。

その下、「(4) 総合教育会議の開催状況」でございます。現大綱策定後、毎年、総合教育会議を開催し、市長と教育委員会において意思疎通を図り、地域教育の課題やあるべき姿を共有してきたところでございます。

最後に、「2 次期大綱の基本的な考え方について」でございます。

国の第4期教育振興基本計画を踏まえ、新たな視点「DXの推進」「地域共生社会の実現」を盛り込むこと、第五次総合計画、第3期東広島市教育振興基本計画の素案を踏まえ、一部見直すという方針でご協議いただければと考えております。

別資料といたしまして、まずA3のものでございますが、「第五次東広島市総合計画」、「東広島市教育大綱」、そして、現在策定されております「第3期東広島市教育振興基本計画」の関係する項目を列記したものについて、現大綱を載せたものと、この後ご説明いたしますたたき台、赤字の修正が入ったものでございますけれども、これを1枚ずつ2種類ご用意しております。

そして、次期大綱の策定にあたってのたたき台として配布させていただいておりますのが、A4サイズのこちらになりますけれども、一部、事前に送付いたしました中身が変わっておりますので、ご容赦いただきますよう、よろしくお願いいたします。

それでは、たたき台に沿って主な点のみご説明いたします。なお、朱書き部分が今回加筆修正した箇所になりますので、ご承知おきください。

まず、たたき台の1ページでございます。1枚めくっていただいて、「1 東広島市教育大綱について」の「(1) 大綱策定の趣旨」の一番下でございます。本大綱は具体的な大綱の期間を定めず、社会情勢の変化を踏まえ、適宜見直すこととしております。

2ページでございます。基本理念の説明について、DX、AIの活用が進むことや、コミュニティ・スクール、地域共生を推進することにより、ウェルビーイングを実感できるまちを構築することについて加筆しております。

続いて、3ページでございます。基本方針1について、「当たり前前（の）のことが当たり前（に）できる子どもの育成「東広島スタンダード」の定着」の項目がございますが、これにつきましては、特別な配慮を要する子どももおりますことから、記載しないこととし、これに代えて現在、国において議論されている、こども大綱の中から「こどもの成長の保障と「遊び」の充実」を加えております。

基本方針2につきましては、皆様ご承知の第3期東広島市教育振興基本計画の素案を参照し、記載しております。下段に「小中一貫・小規模校の教育の充実」、「教育DXの推進」を加筆しております。

続いて、4ページでございます。基本方針4につきましては、先ほど第五次総合計画に基づき展開している施策として挙げました、Town&Gown構想の推進について記載しております。Town&Gown構想とは、Town、市と、Gown、大学が一体となってまちづくりに取り組むという構想で、行政・地域が抱える課題を大学の知見を活かして解決を目指し、企業などの多様な分野と連携しながら、地域コミュニティづくりなど、つながりづくり・地域づくりを進める取組みでございます。

続いて、基本方針5については、現在策定中の第2期東広島市生涯学習推進計画との整合を図っております。

以上、本日の協議の参考としていただければと思います。

議題についての説明は、以上でございます。

<高垣市長>

それでは協議に移ります。教育大綱の策定にあたっては、国の教育振興基本計画を参酌することが法に定められております。すでに教育委員会においては、本市の教育振興基本計画の策定に向けた議論がなされ、素案を策定された状況でございます。今日は、国と本市の教育振興基本計画を踏まえつつ、大綱の策定に向けた議論を深めて参りたいと考えております。

それぞれの委員の皆さんからこのことに関して、ご意見を賜ろうと思っております。それではまず始めに市場教育長、見直しのたたき台についてご意見を賜りたいと思っております。

<市場教育長>

まず、今回、地域共生であるとか、コミュニティ・スクールというのが、新たに出たところでありまして。これについて、現在、コミュニティ・スクールを本市においては来年度に全ての学校で設置することとしております。しかし、段階的にコミュニティ・スクール、学校運営協議会を設置したことから、学校によっては様々な取組みの差が生じております。コミュニティ・スクールが、最終的には学校を核とした地域づくりというところまで展開していけば、地域共生につながり、学校も地域も保護者の方も利益になる。そういった教育になろうかと思っております。そのあたりをしっかりと取り組んでいくことは大切なので、ここに載せて

いくことは大切だろうと考えております。

<高垣市長>

ありがとうございます。それでは続きまして、渡部委員からお願いします。

<渡部委員>

大綱を拝読しまして、包括的に学校教育、それとあわせて社会教育といいますか、成人教育に関する目配りというものができていると思います。以前に比べまして特徴的だったのは、Town&Gownの言葉をさらに充実しようという、そういうところは大変大事なポイントだと感じました。そういう中で今、学校教育の方は本市の場合充実しておりますけれども、いわゆる学び直しといいますか、成人に対して、先進地域ではリカレントだとか、スキルアップ、そういう学び直しに取り組んでいるところが出てきております。

そういう中で本市は、大学との連携というものを今、標榜しております。これまでも大学との連携があるわけですが、さらに今回Town&Gownということで、それを一層充実させようと。Town&Gownはいろんな意味がありますが、特にその教育に関しまして、成人教育といいますか、そういうところでこの学びの機会にもう少しレベルの高い、専門性のある、学びの機会を充実する必要があると思います。

そういう中で、市内の大学とか、新しい学びのスペース、施設といったものをいかに確保するか、ということを中心に充実させていくことが必要だと思います。そういうことが謳われておるといふふうに理解しております、さらにそういう方向で充実をしていくことが、本市の特徴をさらに輝くものにしていくのではないかと感じました。

<高垣市長>

ありがとうございます。それでは続きまして、京極委員からお願いできますか。

<京極委員>

今、渡部委員がおっしゃったように、乳幼児教育のところから生涯教育のところまで、かなり網羅的に提案をされている内容で中身的には詳しいなと思いました。何回目だったか分からないのですが、以前はやはり乳幼児のところ結構大事なので、今だともども未来部ですかね、との連携だとかというのをかなりここでも議論をされて、実際入れられた。これを全体的に見ると渡部委員がおっしゃったように、実際ここで生活をされている方、ちょっとこれ産業部などになるのかもしれないですけど、実際に働いている方がもう一度リカレントとか、リスキリングとかするところを、この総合教育会議の中で入れるかどうかは別にして、当然関わってくるわけですから、そこはやっぱりちゃんと具体的に充実をしていくべきかなというのは思いました。確かに大学とか企業、特に企業との連携というのはかなりこの中で謳われているので、どちらかというところの中に出ているのは、企業からのギブの部分ですけど、じゃあテイクのところはどうなのかというところ。となるとやはり、先ほどおっしゃったように、企業の方の人材育成の部分もやはりちゃんと盛り込んでおかなければいけないの

ではないかという具合に私は思います。私は工学部なので、そういう視点で見えています。それがずっとこの乳幼児のところから少しお年寄りの方までの市民へフィードバックというんですかね、特に働く方の働き方のところも含めて、少し具体的に検討されればいいのかという具合に思いました。

Town & Gownは、言葉はすごく良いんですけど、具体的にちょっと我々見えないところもあるので、もう少し市民に分かるような形でご提案をいただければいいのかと思います。いずれにしても、これをもう少し具体的に進めていくと、非常に中身のあるものになると思いました。

<高垣市長>

ありがとうございます。それでは続きまして、島本委員お願いします。

<島本委員>

お二方の委員さんと同じように、0歳から生涯100歳までの間のものが入っているというふうには思いました。細かいことになるか大きいことになるか分からないですが、「人づくり」というのがキーワードですが、所々に「人材育成」と書いてあるんですね。だから、市が求めている、こうあるべきという人を育てるのか、いやいや、この東広島の中でどんどん創造的にそういう人たちをたくさん多様な人たちを育てるのか、ピンポイントでこういう力を持った人を育てたいのか、そのあたりが「人材育成」と「人づくり」という言葉の違いがちょっと難しいなというふうに思いました。

それから、ざっと読ませていただいた時にぱっと見てわかりにくい。例えば、文章になっていると主語は誰なのか。子供が基礎的・基本的な知識を活用してなのか、教育委員会として活用して何かをしようとしているのかというあたりが、例えば基本方針5とかは、市民がいつでもとか、市民が何とかというふうに書いてあるんですけど、1とか2のあたりは誰が主語になって、それを誰が支えていくのかというあたりがすっきりすればいいなというふうに読んでいて思いました。

それから基本方針3のところも、子供たちに興味関心を持たすために、大学とか教育研究に力を借りるのか、それとも力を借りて子供たちに興味関心を持たすのか、どちらが先かということになろうかと思うんですが、読んでいてどちらが主なのか、どんな創造性を伸ばすためにこれを活用するのか、こういうことをどんどん入れて、人を作っていこうとしているのかというあたりがすっきりすると思いいなと思うところです。

それから本当に細かいことなんですが、生まれ育った地域といっても、東広島は国際的にも、それは県外からも企業からもいろんな人が来ています。そういう人たちに郷土愛を培ってもらうのか、生まれ育った地域の伝統というあたりになると、言葉に少しどうなのかなというのが基本方針2のあたりです。

それからもう一つ細かくてごめんなさい。推進にあたっては市長部局と教育委員会がそれぞれというのも大切なことだと思うんですが、ただこれは尊重し合うとか、頭では一体になってというふうに同じ大綱の中に、言葉が二つ出てくるとどっちを取ったらいいのか、二つ

ともそれぞれ意味があるのかと思ったところです。

それからさっきもありましたが、横文字がいっぱい出てくるので、前々回に西村委員もおっしゃったけれど、後半にその言葉の意味というか、注釈を書いていただくと、こういうものを使ってこう書いているのだなということが分かる気がしました。すいません、重箱の隅をつつくようなこと言って申し訳なかったですが、よろしくお願いします。

<高垣市長>

どうもありがとうございます。それでは続いて、西村委員からお願いできますか。

<西村委員>

教育大綱の方をざっと読ませていただきました。一つ思ったことは、乳幼児教育から高齢者の生涯学習に関わる人ですね、教育に関わる人を増やしていくことが、社会に関わる人を増やしていくというものになっていけば、そのための施策を遂行していけば、よりよい教育の充実につながるかとと思います。それぞれ、例えば子育てに関しても、乳幼児から小学校、中学校、高校とですね、社会に出すまでの教育というものを、まず子供が社会に出ていくために何が必要かということを中心に考えて、Town & Gown 構想とか、そういった大学との連携というものを取り入れながらですね、子供を育てながらまたさらに、保護者、親世代も学び直しをしていくという形になっていけば、とても東広島の教育が充実し、県内外からの移住者が増えている中で、郷土愛を育む取組みにつながるかと思いました。

<高垣市長>

ありがとうございます。それでは棚橋委員からお願いできますか。

<棚橋委員>

まず学校教育に関して、前回の大綱が作られた時は現在の学習指導要領がすでにスタートはしていたとはいえ、まだ始まったばかりに近いこと。学習指導要領の今回のいろいろと重要なことがあるんですけど、一つはやはり地域社会との連携、学校と地域社会の連携というものもあると思います。で、数年経ちまして本市のその様子を見ると、本市はこの連携はかなり充実していると言えると思うんですね。地域住民の学校に対する参画というの、ある意味組織化されていて、どの学校においてもきちんとできていると。で、それをそのまま継続するというのでそれを一層充実させるということが、方針にも書かれているというふうに理解しました。これは大事なことだと思っております。

もう一つ先ほど言及ありましたが、高等教育機関が多い本市の特徴というのが生かされたものというので、このTown & Gownをはじめ、他の自治体にはない強みというものを今後も生かしていくというのは、東広島の教育ということで特徴になっていくというふうに思っています。それが明示されているのは非常に良いことだと思っております。

それから、大きな社会の変化、特にコロナ禍を経たということも含めて、その中の一つとして教育のデジタルトランスフォーメーションの推進ということ、これはもうすでにどこも

動き始めておりますが、本市でも先ほどの高等教育機関の連携も含めて、DXの推進がかなり行われている、一層それが明確に明示されたというのは良いことだと思っております。

それから、現在、社会では、教師の労働環境ということが社会的な問題として、言われてきております。前回から、教職員が能力を発揮するための環境整備と指導力の向上というのがございますけれども、その中に今社会で問題化されている教員の働き方ということもこの項目の中で、何か具体的なことが今後展開されていくのであろうというふうに期待しております。

それから、先ほども言葉が出ました郷土愛の醸成というのが新たに加わったということですが、これは今後の具体化の仕方というのが難しいのかなと思っております。先ほどもありましたように、本市は外国にルーツを持つ方も含めて非常に多様な方々、ここで生まれ育った方だけではない。幸いなことに人口が増えていくというこの元気なまちは、やはり外からの社会的増も多いということを考えてときに、郷土をよく知る、そしてそれによる自然な愛着が湧くということは非常に重要だと思うんです。それをある意味、偏狭な郷土愛というのに直結させないように考えていくという、この具体的な内容が今後重要になってくるのかなと。方針としては重要だと思うんですが、その具体化のところで工夫が必要だなというふうに考えております。

<高垣市長>

どうもありがとうございました。基本的には表現の仕方、島本委員からありましたように主語が明確でないであるとか、人づくりあるいは人材育成、そのあたりの関係をご指摘いただきまして、これについては少し内部で議論しないといけないと思っておりますが、大きな点でいくつか指摘をいただいたような気がします。基本的には概ね網羅的に書かれているということで、言うなれば市長部局が作る、0歳から100歳に向けた人づくり、教育、これについては大体ポイントを押さえているのではないかとというふうに認識をさせていただきましたが、いくつかの点で少し議論していく方がいいかなというように思いました。

まず、教育とそれから地域づくりということが、市場教育長と棚橋委員から出ましたけれども、やはり生涯教育なども含めると最終的にはどのような地域をつくっていくかということが大変重要であり、そのあたりは中には一応書いておりますが、このあたりについて何かご意見があれば、お伺いしようと思うのですが。

実は大綱の中にウェルビーイングという言葉が今回入れさせていただきました。2の基本理念のところですが、このウェルビーイングというのは、3年ぐらい前に行政の中でも使われるようになってきて、今回の国の教育振興基本計画においてもウェルビーイングという言葉が出てきており、要は幸せをどういうふう to 実現していくかということでもあります。こういう、ウェルビーイングというのでも今回大綱の中に盛り込みましたけれども、最終的には市民の皆さんがそういうことを感じてくれるような教育、これは生涯教育含め、そういう展開をしていかなければいけないということで大変重要なことだろう。これはまさに地域と一緒にやっていかないとできないということがあり、地域づくり、そしてそれは最終的には市民のウェルビーイングの実現だと。そういうために、この生涯教育を展開する必要

があるというようなことで入れたところですよ。この地域づくりに関してご意見があれば。

それと学校ではコミュニティ・スクールということも、前回の大会の時にはなかったのですが、この5年ぐらいの間で、学校教育の中にコミュニティとの関わりということが大変重要だということで、地域の力を借りながら子供を育てていくという取組みを進めているところですよ。そのようなことを含めて、地域づくりに関してご意見があればお願いします。後でも結構ですよ。

それと渡部委員と京極委員からありましたけれども、学び直しであるとか成人教育、それからリカレント、リスキリングみたいなことに関して、どういうふうに取り組んでいくのか。これは企業もしっかり取り組んでいただく必要がありますし、行政としてもそういうことをサポートしていく必要があるのだろうと思うんですよ。なおかつ、わが市には大学もあるということで、大学を活用したそういうことができないかというのは、今後の施策の中で考えていかなければいけないというような気がしています。

それから、それに関連してTown & Gownですよ。我々はこちら4年、ずっとやってきましたが、市民の間には浸透していないというのは思っておりまして、これをどういうふうにご理解いただくのか。

このお手本にしている、アメリカのアリゾナ州立大学と地元のテンピ市との関係が、我々のひな形になっているのですが、アリゾナ州立大学の学校のミッションというか、それが地域に貢献する大学だと、地域課題をどう解決する、そのソリューションをどう提供するか、そしてそういう人材をどう育てていくかというのが、この大学の大きな柱になっているんですよ。それが地元と連携しながら、課題解決に向けて、いくなれば実学といいますか、そういうことに取り組んでいるというところがありまして、広島大学、近畿大学、広島国際大学とも、この取組みを進めようとしています。

広島大学が先行しました。近畿大学が今年からスタートしました。そして来年からは広島国際大学とも進めていくということなんですけど、要は大学の知的資源、研究資源を活用しながら、その地域の課題を解決していくというのがTown & Gownの取組みでして、それからすれば、まさに社会が必要な新しい知識というものを、どういうふうにご市民の皆さんにも提供していくかということも、Town & Gownの中でやっていかなければならないものじゃないかなと思うんですよ。それがリカレントであり、リスキリングである。そういうことができるわが市ということと思っておりまして、そこらあたりをもう少し分かりやすく表現をしたほうがいいのかというような気がいたしました。これに対して何かありますでしょうか。

<渡部委員>

Town & Gownに関連して大学、国立大学の場合、産学地域連携センターというセクションがあります。広島大学の場合もサイエンスパークの中に、産学地域連携センターという建物があります。そこではどちらかというと、産学・地域とありますけども産学の方が強くて、最近特にそういう傾向になっております。そういう中で地域連携のセンターの事務局もあるし、そういったスペースもあるんですけど、そのところが市との連携がまだ十分でき

ていないのではないかと思います。せっかく本市の中に、サイエンスパークの中に広島大学としてありますので、そういうものとの連携・活用ができれば市民のためにもいいのではないかと思います。

<高垣市長>

ありがとうございます。Town&Gownを進めていくときに、すでに産学地域連携センターがあったのですが、市との関わりが少しご指摘のように弱くて、どっちかという和我々の地域の課題を中心として、Town&Gownを動かしてきたところがないこともない。そういうことも含めて、これからどういうふうに大学との連携を図りながら、先ほどのリカレントみたいなことを展開していくかを考えていきたいと思います。京極委員、こういった機能は近畿大学にもありますよね。

<京極委員>

近畿大学はセンターまではいかないですけど、地域貢献委員会というのがあって、そこが中心になってやっている。ちょっと私は今、工学部を離れているので細かいところまで分からないですけど、私がやっていた時にはそういう形になっていました。ですから、その地域貢献のところは教育委員会の関係もありますけども、今だと、産業振興課になるんですかね。そこもやっぱり絡んでくると思う。私は呉の産振興の理事も務めていますが、呉は産振興があって、企業数も多いこともあって、だから結構、大学の先生と企業との連携をかなりやられているんですね。それがすごく弱いと思います。ちょっとここで発言するべきではないかもしれませんが、教育という面ではやっぱり関係をしてくるので、そういうところとの連携を少し強めながらやっていくこと。

それともう一つは、何もかもたくさんできない。ですから、リスクリングについても、大手は自社でできると思うんですけども、中小企業というのはなかなかできないと思う。そういう中で、まず核となる人材を育てるようなシステムをここで作っていくと。そうすると、人が企業を少し大きくすると、外からもやっぱり働きたい。で、やっぱり働くためにはリカレントあるいはリスクリングも必要だねということで、そういう形で展開をしていくことが必要なのかなという具合に私は思っている。

結構システム難しいので、ちょっと教育委員会との乖離があるかもしれないんですけど、でも一応そのあたりを共同してやっていけば、もっとこの地域の企業も伸びてくるし、そうすると地域が活性化すると、こういう教育のところにも反映してくると思うので、そのあたりは東広島が少し弱いなということを感じています。

<高垣市長>

また産業部の方にも話をしながら、そういうところにも力を入れていきたいと思います。それから、島本委員からありました人材育成と人づくりは、もう少し定義を明確にすれば違うのではないかとのご指摘だったかと思ったのですが、そのあたりのご見解を教えてください。

<島本委員>

私もはっきりしているわけじゃないんですが、何となく人材育成ってつくるっていう、何か理想のものがあって、それに対してある程度教えたり、それから与えたり、経験させたりして、何人かをつくるみたいなイメージがある。人づくりっていうのはこうしたい、ああしたい、だからあそこに行って学んで、そして資格を取って貢献していこうとかいう、基本、元が人から始まるのかなと思って。そうするとこの大きな目標は人づくりですので、人づくりでいったらいいなっていうのは思ったところです。なので、まだはっきりした意味分けをしてないので、吟味していただければと思います。

それから、先ほどの大学との関係の中で、大学と関係するか分からないですけど、学術研究機関とか、それから高度ないろんな技術とかっていうことが、大学の中から出していただけるというのはありがたいことなんですけど、今やっぱり介護、ここの福祉と教育、双方向とかいうのもありますけれども、いずれ子供たちも歳を取っていく、そのときにお年寄りを見て介護をするとか、それから、そういうことを体験している子と、していない子っていうのは違うと思う。だから、人数がどんどん減っていく中に、高齢者がどんどん増えていく中に、東広島を維持していこうと思うときに、0歳から育てるのも大事なんですけど、今高齢者も大切にするとするか、高齢者の方たちが自分で生活できなくなったときに、そういう施設とか、それから介護の充実とかっていうのがあれば、本当に地域と密着したまちづくりにもなっていくんじゃないかなと思います。

そういう意味では広島国際大学とかが、福祉とかいうこともしてらっしゃるので、ぜひ研究とか、そういう最先端の技術を含めて、あと一つ介護っていう部分が入ると、本当に豊かなとか、生きがいとかっていうものが、あのまちに行ったら幸せになる、ウェルビーイングになるというのが実感できるかなと思ったところです。

鋭いところと、やさしいところ、やさしいまちづくりが含まれると特色が出るかなと思います。ちょっと最後にすいません。地域づくりのところで、以前は学校の中で特色ある学校づくりという文言でしていました。そうすると、金太郎飴でどこも同じようなものをしていったんだけど。ぜひ今からは、各学校が主体的に地域づくり、自分の学校の特色あるものをつくっていくことを教育委員会も見守るとするか、そういう支援をしていくというのが必要かな。それが本当に地域づくりだなというふうに思いました。

<高垣市長>

ありがとうございます。地域づくりにもご意見いただいて、特色ある学校づくりで例えば、一校一和文化学習みたいなことで、学校の地域の特徴をしっかり子供たちも理解しながら、創作表現してくれるところがありましてね。こういうことも、地域と一緒にやっていくということがある。まさに地域との連携も生まれてきている学校もあります。これは棚橋委員から、郷土愛の醸成でどういうふうに、具体的に取り組んでいくかというようなご指摘をいただいたので、この後もう1回このことについては少し議論させていただこうと思います。

介護との関係についても、広島国際大学と来年からTown & Gownをスタートします

けれども、健康とそれからこういう介護について、一緒に勉強しながら、モデルケースを作りながら、それを水平展開していくようなことを考えているところです。

それから、人づくりと人材育成について、我々は言葉をその時に応じて使っているような感じがします。総合計画の中では人づくりということで、大きな括りで取り組んでいるのですが、いろんな計画の中では人材育成という言葉もあります。これは少し整理をさせていただこうと思います。ありがとうございました。

それから、西村委員から教育についていろいろ関わる人材を、例えば保育だったら保育士だけではなく、そこにいろんな人が関わる中で、子供達は成長していくのではないかと。それは小学校、中学校、高校においてもそうだろうというご指摘だったと思うんですね。それで、義務教育のところはコミュニティ・スクールを進めているのですが、保育所では保護者の皆さん方が保育施設と一緒につくっていただきながら、園庭ですね、そういう環境づくりをしているところもあるのですが、必ずしもそのところはまだ体系化されていないというところです。このあたり、もう少し何かご意見があったら。関わる人を増やすという意味で。

<西村委員>

先ほどの関わる人を増やすということで、どうしても今まで学校、保育園というのは通っている子供の保護者が関わって、それがだんだんコミュニティ・スクールの制度とか、そういったものも取り入れながら、実は地域のおじいちゃんやおばあちゃんが近所にある保育園を見守ってくださっていたりとか、携わってくれていたりとすることがあったと思う。

先ほど島本委員も言われましたが、例えば小学生や中学生が逆に高齢者施設の方に関わるとか、そういったことで人と関わる、教育という、その学校教育というもののあり方が今、変わってきていると思っております。特に今の子供たちは、インターネットの活用などもすごく、今いる大人よりも使い方が上手ですし、その使い方を教えることも教育なんですけど、逆にそれを自分の身の周りにどのように活用していくことかというものも、実体験として扱っていくことが、それも教育ではないかなと思っています。

なので、例えば保育園で少し先輩のお兄ちゃんお姉さんが関わる、もしくは、今少子化で兄弟のいない子も多いので、そういう子供が子供を、昔は当たり前だったことを、そういった経験を、ぜひ子供たちですね、教育の中にも取り入れていただけると、今の子供たちが人との関わりというものを考えるときに、小さい子の面倒を見る、先輩の言うことを聞く、お年寄りと関わる、そういった経験をできるような環境を作っていくことが、後々はウェルビーイングにつながっていくのではないかなと考えています。

子供が関われば、必ずその保護者、周りの友達、すごく人とのつながりの輪が広がるということは、自分の小学校の保護者、子供が小学生になった時にとても感じましたので、そのようにしていただけたらと思う。

<高垣市長>

なるほど。これまでは、同じ年齢の子が同じ場で学ぶということが多かったわけですが、異年齢で学ぶことの効果みたいなことも、一方で言われているところもありますよね。保育

園でお兄ちゃんが小さい子の面倒を見るという、そういうことも大変重要なことなんだろう。だから関わる人というのはその教育関係者じゃなくて、当事者もいろんな関わりを持っていく。当事者というのは子供ですよ。重要なんだなというご指摘と理解すればよろしいですかね。

一つですね、例えば子ども民生委員の活動を東西条小学校の自治協では行っているんです。これすごく素晴らしいなと思ったんです。子供がそういうお年寄りであるとか、あるいは社会的孤立の問題にも、社会がどういうふうになっているかということに目を向けるということが、後々において大変重要だと思ひましてね。これこそやっぱり地域と一緒にやることにおいて、そんな教育ができるだろうなというふうに最近思いました。ありがとうございます。

それから、棚橋委員からもいくつかいただいたのですが、一つその郷土愛、いろんな人が必ずしもここで生まれた人ばかりではない。途中で入ってくる、あるいはわが市も外国の方もたくさん増えてきたという中で、郷土愛というものをどういうふうにつくっていくのかという、これは大変重要な問題だと思うんですよ。例えば外国人も今、わが市で約 8,700 人ですから、安芸津町の人口と同じくらいの人数が外国人です。比率からしても 4.6%ですから、全国の倍ぐらいなので、そういう人たちと一緒に住む地域におけるアイデンティティを、そこでどうつくっていくかというのは大変重要なことです。それが今、わが市は伝統的に一校一和文化学習ということを行っておりまして、例えば西条小学校では、酒造りに関するオペラを毎年6年生が取り組んでおり、そういう意味で言うと、そういうものでいろいろ生まれも育ちも違うけれども、ともに今、地域に住んでいる人が一つの創作活動をする中で、アイデンティティが醸成されているということがあります。具体的な動きというのはそういったことなのですが、これに関して何かあれば。

渡部委員、お願いします。

<渡部委員>

本市は九つの町がありますけども、豊栄あたりはどんどん人口が減って、小学校も一つになっております。そういう中で廃校となった地域の子供たちはスクールバスで通っているわけですね。普段はそのあたり歩けば、自分の町の有名な場所とか神社とか、そういったところを知ることができて、郷土に対する誇りとかそういうものを持てる。ただ、スクールバスが通り過ぎてしまうようだと、そういうのは減ってしまうという危機感を抱いて郷土のカルタを作ったという、そういう話もございます。やはりそういう地域の育ったところに誇りを持つというのは、何らかのそういう努力しなきゃいけないと。同様のことが下見地域の方においてあります。外国人の留学生、あるいはそういった地域の外国籍の子供たちも含めて、その地域でどういう文化遺産があるかということを知ってもらうために、ウォーキングマップの立派なものを作って、最近ではそれを英語版にして、留学生とか外国人の子供たちが一緒に歩けるようにというので作りました。そういう地域の努力というものが、他の地域でも広げればいかなと思っております。地域ごとにやはり危機感を抱いていらっしゃる現実があるなと思っております。何らかのそういったモデルケースといいますか、そういうものも伝えられる仕組みがあればいいかなと思っております。

<高垣市長>

ありがとうございます。地域を探訪するようなカルタやウォーキングマップで、より地域を知りながら、地域に対する誇りみたいなものをつくっていくことをされているというご紹介がありました。何か他に、具体化においてこんなことを考えたらいいいというのがありましたら。

棚橋委員、何かありますか。

<棚橋委員>

今、渡部委員がおっしゃったような具体的な策というのは、あまり有効なものを提案できることは持っていないですけど、先ほど市長がおっしゃったように、アイデンティティという言葉、それからそのために何というか、共有というのがキーワードになるんじゃないか。学校教育だけじゃなく、社会教育も含めてですけれども、やっぱりまずは住んでいる人、特に外から入ってきた人たちに対して、わが市を知ってもらうという活動が一番重要なことだと思うんです。同じ知識、あるいは同じ感情を共有することによって、この市の一員なんだというアイデンティティというのは自然に生まれるものだと。アイデンティティというのは外から強制してつけられるものでは決してないので、まず必要なのは知ることだと思うんですね。その知ることから、郷土愛に直結させようと焦るのは私は逆効果だと思っている。知ることによって東広島市が好きにならないという住民がいてもそれはしょうがないと思うんですよ。それを無理に愛することを強要するのは、私は逆効果じゃないかなと思っているんですね。

私がすごく危機感を抱いたのは、例えば大学生だったら4年ないし、5、6年でまた別のところに戻っていく。つまり東広島市民でいる間はそれくらいの期間しかないわけですけども、その期間に自分は東広島市民だというふうに意識を持ってくれる学生がどれくらいいるかということだと思うんです。市長、渡部委員がおっしゃったように、学生の場合は下宿と大学の間を行ったり来たりするだけで、本当に市というものに対して関心を持ってきているか。その前提として知っているか。そもそも、住民票を移していない学生がたくさんいる。選挙の時に、ここの市議会議員の選挙の時に選挙権がないっていう学生が、いろいろ多いんです。授業の中で話していて。本来、法令違反だと思うんですけどそれは。親は住民票を移すなと言いき、選挙の時には帰ってきて、村の候補者に入れてもらいたい。現実はそのような学生がたくさんいる。そういう学生に市民としての意識が育つかと。市議会議員の投票をしない者が、市の一員になっていることになるという非常に難しい問題である。ただこれは住民票を移すことができるかというのは難しい問題。まあこれはちょっと余談になりますけども。

ですから、そういう学生であっても、まずは自分が4年間を過ごす市がどんなところなのかということを知ることが親しみにつながっていくと。まずは添うてみようじゃないですけども、そういう活動をどうすればいいのかというのがやっぱり一番重要な。だから、小学生で一校一和文化学習、これ非常に効果あるしいいと思うんですけども、もう少し成人層、学

生をはじめとして、特にいろんな企業が来て、もっと働く人が市外から来てくれるようになった時に、東広島市というのを社会教育でそういう層にどうやって浸透させるのかというのが、先ほどの渡部委員の話もその一つですけれども、そういう策がやっぱり必要なのかなというふうに感じているところです。

<高垣市長>

なるほど。私は義務教育ぐらいから高校生までの子供たちに、いかにわが市のことを誇りに思ってもらえるかというようなことを中心に考えていたのですが、棚橋委員からご指摘いただいた学生、これはおっしゃるとおり、わが市の人口は住民基本台帳で19万人、実質は19万8千人ぐらいと思うんです。その乖離は何かというのはほとんど学生なんです。学生が1万7千人くらいいますけど、ほぼ半分ぐらいの子供たちはたぶん住民票を移していないんですよ。ですから、わが市との関わりというものが非常にそういう意味で弱い。

実はいろんな取組みはしているんです。わが市を知ってもらおうということで、入学した一年生にバスをチャーターしていろいろなところへ行っていただくとか、あるいは地域の中に入って、地域の問題を一緒に解決してもらおう学生地域おこし協力隊制度みたいなものを作り、そういうことも行ってできるだけ関心を持っていただくという取組みはしているのですが、そんなに多くないという現実があります。

ただ大学生の中で、また帰ってきたい東広島というネーミングで活動してくれている団体がありまして、一旦は就職するけど10年ぐらい経って都会の生活がちょっと自分の人生観と違うな、帰って来ようかなというときに、東広島を選んでくれる子供たちも実は出つつあるんですね。それはやっぱり、ここでいろんな人間関係を作る中でいい所だったというふうに思ってくれるから。ある意味、郷土愛的なものがあるということなのだろうと思うんです。そういうものを、どんどん増やしていかないといけないと思っていたのですが、生涯教育の中でもそういう層にしっかりと、わが市のことをまずは知ってもらって、共有してもらって、その暁にそういう郷土愛的なものができるばというような感じでしょうか。

<渡部委員>

棚橋委員がおっしゃったように留学生ですね、私も国際交流のお手伝いをずっと続けていたんですけども、国へ帰ってから、こちらの方に来る、懐かしいと言ってわざわざ来てくれる元留学生もいるんですが、ほとんどそれは先生、指導教員との関係なんです。大学でどうだったからというんじゃなくて、先生に非常にお世話になったとかいう思い出があるんで、それで家族と一緒に来て、このあたりが懐かしいと言って帰って行く。そういうことも実際私もよく見る。ですから、市民との関係で、市との関係で、本当は大学がしっかりしてほしいんですけども、そういうところをもっと考えていただければなど。ですから、特に大学生よりも小中学生の子供たちの方が地域の印象といいますか、結びつきが強いので、そういうところの教育といいますか、この郷土愛といいますか、そういうものを持ってもらえるような、雰囲気を作っておく必要があるのではないかというふうに思います。

<高垣市長>

先日、ジョージアの大使が東広島を訪問されました。お父さんが広島大学の留学生で、子供の時、寺西小学校で3年ぐらい過ごしたそうなんですよね。わが市と寺西小学校を訪問していただいたのですが、その3年間というのが東広島で非常にホスピタリティの高いもてなしを受けた地域であると大使が言われるんですよね。やっぱり地域をあげてそういう外国の方を受け入れるということが、いずれ郷土愛ではないだろうが、東広島を思う気持ちになっていくのかなという感じがしたんですよね。渡部委員、棚橋委員のお話を聞いて、やっぱりそういうふうに市民もみんな一緒にやっていく必要があるんですよ、みたいな生涯教育を展開していく必要があるかなという気がしました。そういう意味でいうと、東広島の皆さん方は、そういうところがあるんじゃないかなという気がするんですよね。ありがとうございます。

<京極委員>

今、おっしゃったとおりだと思うので、せっかくここに国際性ということがあれば、留学生と小学生とか中学生とかの交流をもっと増やすと、自然に英語とかもたぶん得意になってくると思う。無理やりに学校で英語教育するよりはそっちの方がうんと早いと思うので、そういう交流の場をもっと作れるような形にしたらいいのかなと思います。どれだけネイティブの人と関わっているかというのが英語教育ってすごく大事だと思うんです。おそらく小学生とか中学生だったら、半年ぐらいアメリカで学校に行ったらしゃべれるようになる。だからそういうところも含めてやっていくといいと思いますし、私も留学していた時には日本語文化学科の子たち、日本人会が結構そういうところにも行って、ボランティアで日本の文化を教えたりとか、折り鶴を折ったりということは、妻もいっぱいやっていました。だからそういうことをすると、やはり日本のことも知ってもらい、我々行った人間も逆に、いい思いもするわけですよね。だからそれがたぶん、同じようにここでいろいろ東広島でも先ほどもお話あるように、そういう仕組みを作ってあげることがすごく外国人の方にとって大事なんじゃないかなと思う。留学生の方は、学生だけじゃなくてほとんど家族ぐるみで結構来られているので、受けとめ方って全然違うような気がするんです。そういう仕組みをもう少し取り入れていただくと、ウィンウィンの形になってくるのではないかなというふうに思います。

<高垣市長>

多文化共生の観点から、しっかりそのあたりもいろんな施策を展開していかなければならないと思います。国際フェスタというのをこの3年行っており、今年は5千人ぐらい来るような祭りになりました。留学生はもちろん、技能実習生を含めてそういう方々と市民の方も参画して、交流を図っていくというような文化ができつつあります。そういう意味も含めて、これからいろんな施策を展開していく必要があるかなというふうに思っています。

一応、先ほど皆さん方からご意見いただいたところで、議論すべきものはさせていただいたところです。その他に、こういう点について少し配慮しておけばいいというようなことが

ありましたらお伺います。

渡部委員、お願いします。

<渡部委員>

基本方針2の下の方に書いてございます。福祉、教育、双方の視点によるきめ細かな学びということがあります。この中で関連したものとして、基本方針5の一番下の生涯を通じたスポーツや文化芸術活動と書いてあります。最近感じておりますのは、中高齢者の方も健康づくりということで、そういう指導の現場といいますか、そういう所で立ち会う、あるいは私自身が指導する場合もあるわけですが、そこで感じますことは、特に高齢者の方が二極化される。

一つはいろんなスポーツに積極的に参加して、そして地域の皆さんとペタンクとかそういうことをやって喜んで帰られる方たち。もう一つは、ほとんど運動とかスポーツをあまりされない方ですね。そういう方はどんどん筋力が落ちていって、要するにフレイルの状況に近くなっていくという恐れがあります。

そういう中で、スポーツをすれば体力がつくんだ、元気になるんだという考え方が一般的にあるんですけども、いわゆる健康づくりということに対してはあまりきちんと習っていない方も多いですね。その競技力というものが体力づくりの基本と考えている人が結構多い。大事なことは、生活を豊かに暮らすこと。まさにQOLを維持するためには、基本的な体力、例えば歩ける能力とか、振り向く能力とか、そういう基本的な体力を学んでいただく。そのために、筋トレは高齢者もしなきゃいけないんです。筋トレというと、大きな重りを抱えなければならぬと思込んでいる人がたくさんいて、そういうのは止めておこうと思われる。実はそんな必要はなくて、もっと簡単に誰もが筋力トレーニングができる方法があるわけです。

そのためには、最近気がついたのは、体育館のようなスペースは、大勢でペタンクとかできる人たちがしたらいいんです。けど本当にその地域で体力づくりをするためには、ちょっとしたスペース、十畳間ぐらいのスペースで、ただし板の間ではなくて、畳の間とか柔らかいシートがあれば十分それでできるんですね。体育館のような広いところで走り回るといのは元気な人しかできない。本当に必要な、しっかり伸びをしたり、あるいは筋トレを学んだりという場所は意外と少ない。ほとんどないです。そこは大きな問題だと思っております。例えば、学校の空いた教室一室でも、そういうような部屋があれば、今よりはるかに地域の高齢者の方の健康維持ができる。体力を落とさないで済むんですよ。そのためにコミュニティ健康運動パートナーの資格出しています。年間50人ぐらい、今年も出しています。そういう方の活動の場として、通いの場といったフレイル予防の場所もありますけども、学校とか地域センターの中にそういったスペースがあれば、多くの人をフレイルから救うことができるんじゃないかと、最近思っているところです。

<高垣市長>

ありがとうございます。私は通いの場でそれができているかなと思っていました。

<渡部委員>

コミュニティ・スクールという考え方から、地域と学校がもっと連携しようという話になりますよね。そうすると、学校の近くにそういった元気な方がいっぱいいるわけですから、そういう方々が自分の家でやり方が分からないわけですよ。何かの機会に集まっていただいて、こういうふうには運動すればこんな簡単にできるのか、何も器具もいらぬわけですから。そういうような方法をお伝えする、そういう場というものをつくるということを考えたらどうかかなと思っています。

<高垣市長>

なるほど。その取り組みは来年、広島国際大学とTown & Gownを進めていきますので、その空き教室とか、例えばいきいきこどもクラブの午前中活用といったことをやったら、できないことはないと思うんですね。そういう意味で、生活体力といった基礎体力みたいなものをしっかりつけていただきながら、健康で長生きしていただくというような施策は取れると思いますね。

<渡部委員>

子供の頃からですね、野球や水泳のほかに基本的な体づくり、それをずっと一生涯できるようなものを教えておく必要があると思います。それは今度は子供と高齢者を合わせたものを、そういった地域の指導者、運動指導ができる人が育っていますので、それをもう少し働く場を確保してあげることは大事かなと思っています。

<高垣市長>

先ほど紹介いただきましたコミュニティ健康運動パートナーですかね。

<渡部委員>

そうですね。それが一つの担い手になると思います。スポーツ推進委員という方もいますが、スポーツ推進委員は競技力向上とか、スポーツ大会の大きなセレモニーとか、そういった会の運営において活躍されています。パートナーの方々はまだ別の役割があると考えます。

<高垣市長>

ありがとうございます。今日は大綱の議論ではあるのですが、いろいろご意見をいただきましたので、それを踏まえて修正案を作り、今月の終わりにもう一度皆さんにお集まりいただいて議論したいと思っています。

日頃から、生涯教育の関係も含めて、いろんなご意見があると思います。そういう意見をこの場をお借りして頂戴すると、大変意味があると思います。何か大綱以外のことも結構ですし、少なくともいただいた意見というのは、大綱の中に盛り込もうとするものと、それから個別具体的な施策の中で展開するものと事務局で整理して、ご意見を反映していきたいと

思っています。何かありましたらどうぞご意見ください。

島本委員、ご意見ありますか。

<島本委員>

先ほどと関連する郷土愛となると、さっきのようにここから出ていった人とか、本当にここにずっと住むかとなるが、たぶんふるさと愛であれば、そこで生まれ育ったわけではないけれども、第2、第3のふるさとと、これから子供たちが成長していく中で、あそこでお世話になったとか、あそこで自分の何か学び直しができたとか、あそこで自分がもう一度元気が出たとかいうふるさと探しをして、ふるさとづくりをしていくのだと思うんです。そうになると、例えば、子供の医療が無償化であったりとか、それから交通の便がいいとか、ちょっと東広島を離れた時にあそこで子育てして良かったとか、助けてもらったとか、交通の便が良くていろんなとこに行けたなという、ふるさととしてみんなが見られるような、郷土愛というすごく縛られたものではなくて、ふるさとというニュアンスでいくと、もっと自由であり、それからこれから実現するんじゃないかなというふうに思いました。

それから、基本方針2のところの高い教育力、高い教育力を何にするかですけど、私は昭和の小学校教師だったので、あの頃には、子供が困らないように、大人になったときに困らないように、恥をかかないように、しっかり子供たちを育てようという思いでやってきました。そのためには、学力をつけて困らないように、勉強したいと思うときに困らないように学力をつけていこう。あと恥をかかないようにというのは、挨拶もしないで、それから靴もそろえられないで、時間も守らないでとそういうことがないように学校の中で、道徳として時間を守ったりとか、人を大切にしたりとかして、そういうふうにして育てよという昭和の教育だったような気がするんですけど、今は個別最適とか、それから個に応じたとか、いろんなやり方があるかと思います。この高い教育力というのを見たときには、東広島はその学校力が強いと思うんですね。さっき和文化とかあって、特色があって「学校力」、それからやっぱり「教師力」、教師が東広島で鍛えられて育てられたという「教師力」と、あとは「地域力」、この三つの力があるから高い東広島の教育力があるんだと思います。そこでぜひ、確かな学力、豊かな心、健やかな体と起こして、それぞれに書いてはあるんですけども、さっきのことは健やかな体のところなんかが、これでは何となくどこにもあるような文言になってしまうわけですね。だからぜひここに学校力とか、それから地域力とか、本物の体験をすとかして健やかな体を育てていくというぐらいの意気込みで書かれるといいな。これだと、どこにもあるような感じになってしまうので、ちょっともったいないなと思ったところですよ。

それから最後に、福祉・教育双方の視点のところ、学校現場からいうともう一つここに医療、だから福祉、教育、医療が連携しながら子供を育てていくということ。医療の面でいくと、なかなか教室に入れないとか、そういう時に相談をする体制というのは、まずは子供が幸せになれるし、それで保護者も幸せになれるし、先生たちもそういう意味では幸せになれると思う。ぜひこれからは、福祉と教育と医療が連携した子育てというのが、ますます必要になってくるのではないかという気づきです。

<高垣市長>

医療という言葉がいいですかね。保健という言葉がいいですかね。福祉と対になるのは医療ですね。

<島本委員>

専門機関と連携していくのが、福祉としてよりももっと専門的な感じかと思う。アレルギーだとかいろんな対応が必要になってきますね。その時に、学校が気軽に医療と連携していければという思いがあります。

<高垣市長>

そうですね。医師会などとの連携がありますよね。わかりました。

高い教育力のところをもう少し具体化して、それが文言としてこの特徴の中に入るようにというのは、少しこれは複合させてみましょう。

それと、郷土愛というと少し固い感じがして、ふるさと愛の方がゆるやかな関係性という感じがしますね。

京極委員どうぞ。

<京極委員>

基本方針2のところ、教育デジタルトランスフォーメーション、これ結構すごく広いんですよ。市民の方から見たときに、もう少し何か具体的な項目があった方がいいのかなと思います。最初にお話したところにもありますけど、やっぱり企業もこういうことが大事なので、実際に働かれている方との関係のところも少し入れて、具体化されるといいのかなと思いました。

<高垣市長>

具体的には、例えばG I G Aスクールを推進していますが、市民からはG I G Aスクールとは何をしているのかという意見もあります。もう少しくだいた、分かりやすい表現でしうかね。何か他にございますか。

棚橋委員どうぞ。

<棚橋委員>

非常に小さなことですが、とても重要な文章になっていくと思うのでご検討いただきたいと思います。教育関係者でしばしば引かかるのが、先ほどまず「人づくり」、私も使うんですこの言葉。だけど、前に言われたことがあって、人間形成というときに、形成ということは、主語は大人ですねと言われたんです。人づくり、誰がつくる人がいるんですねということです。それ子供が育つことと、ちょっとニュアンスが違うんじゃないですかって言われたことがあったんです。私は目からうろこで、ああそうか、そういうふうに考えて、子

供自らが育つという観点ではなくて、大人が理想の大人像をつくって子供をその型にはめてつくり上げるという考え方をあなたは持っているんですねと言われたような気がしたんです。だから、今後、非常に重要なキーワードになってくる時に、そのあたりをどう考えるのかというのを、ちょっと難しい問題かなと思って参考までに。

それともう一つ、今回は赤字でこどもの成長の保障というのがあって、ひらがなでこどもと書いてあって、従来の基本方針には漢字で子どもと書いているが、これも教育界ではこだわる人がいますね。こういう文書で市がどういう言葉を使ったのかということで、いろいろと考える人がいるので、どうしてこういう言葉を使うのか、もちろん教育関係の方はご存知のとおり、文科省は子供と漢字を正式に使っている。しかし、各教育委員会に漢字でなければならないと強制することはしないという言い方をしている。学校の先生の中には、漢字の子供なのか、ひらがなのこどもなのか、いやいや子供の子だけ漢字にしなければいけないのかというふうにこだわって、そこから市のあり方というか、方針というものを言われる方もいる。どういう考え方なのかというのは、詰めておいた方がいいのかなと思う。細かいことですけども、そういうところから足元をすくわれないようにすることも重要かなと思いました。

<高垣市長>

少し中で議論したいと思いますが、市場教育長いかがでしょうか。

<市場教育長>

子供については、県の文書とか、文科省の文書に準拠しているところがあります。一般的には、子供を行政文書で使うことが多いですし、学校だよりとかでは子どもとしたり、使い分けているところはあるような気がします。

<高垣市長>

少なくとも混在しているので、そこは統一的な整理を中で少し議論したいと思います。

<島本委員>

一人ひとりもそうですね。

<高垣市長>

そうですね。わかりました。さっきの人づくりはちょっと難しいですよ。確かに人づくり、まさに大人が子供を枠にはめてそういうふうにつくり上げていこうみたいな感じがするので。

渡部委員どうぞ。

<渡部委員>

人づくり政策ってもう何十年前に政府が出した時は反発があった。人をつくるっていうの

はできない。教育だと人をつくるとかじゃないという議論があったように思います。ちょっと提案ですが、例えば人づくりじゃなく、人材育成という言葉をよく使いますので、それもどうかと思います。

<高垣市長>

これも中で、教育委員会と議論をしてどういう表現がいいか。総合計画で人づくりと使っているんですね。これは過去からずっと使っていました。私もそれを踏襲したのですが、言われてみると。

やはり産業界に必要な人材をどうつくるかというのは、少し違うところはあると思うんですね。だからやっぱり、教育全般を通したときに、どういう言葉を使うのがいいのか考えた方がいいですね。

<島本委員>

県教育委員会が是正指導を受けた時に、人材育成というのがすごく言われたことがありました。でもそれは組織づくりと人材育成だった。こういう組織を作っていくために、こういう人を理想とする、育てていこうというので人材育成とあった。

何となくまち全体として、0歳から100歳までと思うと、人材育成がいいのか、人づくりがいいのか。まちづくり、人づくりとセットになったら、人づくりでも違和感はないんです。

<高垣市長>

そういうことですか。少したいてみます。他に何かありますか。

<西村委員>

私が地域の関係の仕事をしているところで一つ、この教育大綱と少し関係あると思った事柄がありましてご紹介させていただきます。学校で夏休みの間、ラジオ体操をしていたんですが、例えば市街地の方は朝からうるさいとか、そういったことで夏休みのラジオ体操を取り止めている小学校があります。そういうところも出てきています。やっぱりそれは子供の育つ環境にも関係している。例えばマンションが建っているところとか、そういった環境によって、今まで学校でしていたことができなくなっている。それで、その話を聞いた地域の人が、近くの空いている歴史広場の活用も含めて、そこでラジオ体操を地域の人と一緒にしようということでこの夏から始めました。そうすると近所の小学生ないし、子供たちが来て、そして地域の人もそこでしているならということで夏休みから。子供たちは学校に通い始めましたが、地域の人たちも健康づくりという観点で、今も続けているそうです。

そういった教育から始まったものが、社会に落とし込みということも、教育現場でできなくなってしまったことが地域、そういう教育を受けた人たちは夏休みといえばラジオ体操だろうという教育を受けた人たちが、それを見守ってきた地域の方々たちが、子供たちに早起きの良い習慣をつけたいから、私たちでしようという動きがありました。

そういった形で、教育と社会はすごく密接につながっているの、これからコミュニティ・

スクールがますます充実していったときに、子供だけでなく、本当は中高生も朝から参加してもらいたいぐらいのものなんですけれども、そういった形でどの年齢層も参加できるような教育というか、一つの健康づくりから、渡部委員もおっしゃっていましたが、簡単な朝の10分の体操でも構わないので、みんながするということで何か体づくり、簡単な体づくりからでも関わっていただけるような、少し教育とは違うかと思うんですけれども、体づくりという点では子供たちも学校でしていることなので、そういったのがどの年齢層も関わっていただければいいなというふうに思いました。

地域からそのような提案が出て、それは学校からというコミュニティ・スクールの制度からいったら、学校でできなくなったことを地域でということ、すごく良い効果が表れているのではないかと考えています。

<高垣市長>

今、わが市は地域共生社会を目指しているのですが、そういう一つの事象になってくると思うんですよね。共生社会をどうやってつくるかというのは、実はなかなか難しいと思いつつながら、でもやっぱり社会教育の中で、そういうことの必要性ということをご皆さんに知っていただく。そういう担い手、例えば地域で反対の声が出たらすぐ引いて止めようというのではなくて、地域をあげてその方にご理解をいただくような、そんな社会を作っていけたら。

なぜ共生社会なのかということを知っていただく教育、教育というと語弊があるかもしれませんが、みんなに理解していただく取組みを、来年からやっていかなければいけないと思っております。まさに地域と学校との関係で非常に強いものがあり、コミュニティ・スクールであり、まだ必ずしもうまくいっているところばかりではないと思うのですが、そういう枠組みをうまくやりながらそれが広がっていくと、本当に共生社会になるかなというふうに私は思うんです。

ありがとうございます。良い事例をご紹介いただきました。

今日はいろいろとご意見いただきましたので、大綱の中で見直すところは少し整理をして、次回お示しできればと思います。その他にも貴重なご意見をいただきました。これはそれぞれの個別の施策の中でも反映させていただくものが多いと思われましたので、今後、関係課において具体化を検討していきたいと思っています。

それでは、本日の会議はこれで終わらせていただきます。いただいたご意見は議事録としてまとめて、公開することとしております。後日、ご確認をお願いしますのでよろしくお願い致します。

次の総合教育会議は、12月25日の14時からを予定しております。

これで閉会いたします。本日はどうもありがとうございました。